『日本書紀』中の朝鮮資料をとおしてみた古代朝鮮語と古代日本語の音韻組織の對比について

馬淵和夫

1 はしがき

ここで古代というのは8世紀以前をさす。もし8世紀以前の朝鮮語についてなんらかのてがかりがえられるならば，それは朝鮮語そのものの歴史的研究のみならず，古代日本語の研究のうえからも非常におおきな利益をもたらすであろうことはいうまでもない。しかし，現在の朝鮮語學においてもちいられている資料をもつてしては，それはかなり困難なことの様である（『世界言語概説』下，朝鮮語）。しかし，もし『日本書紀』中に記載されている朝鮮の固有名詞についてなんらかの處理がほどこされるならば，それは古代朝鮮語の音韻資料になりうるのではないか。いうまでもなく，固有名詞というものは，往々にしてその原義はわすれられてしまつているので，これを意味論的にとりあつかうときには曖昧な點がおおいものであるが，音韻のうえからみるときは，その言語の當時の一般法則からはずれるものではない。こうかんがえると，『日本書紀』中の固有名詞は，おそらく4・5世紀以降7世紀ごろまでの朝鮮語の資料として十分な資格をもつているであろう。

さて，この研究をすすめるためには，いくつかの前提，あるいは方法上の假説が存在する。それをまず列擧しておこう。

イ，當時の朝鮮半島の言語の状況については，河野六郎氏の『世界言語概説』中の朝鮮語に關する解説および「古事記に於ける漢字使用」（『古事記大成』3，言語文字篇）中の記事が大變有益な教訓をあたえてくれる。これによると，當時の朝鮮半島における言語の状況はなかなか複雑であつたらしいのであるが，ここでは一應，百濟・任那（卓淳をふくむ）・伴跛・新羅・高麗という國別に考察することにする。

ロ，資料とするものはみな漢字表記であるが，これらはもと『日本書

紀』を編纂した際の原資料となつた『百濟本記』や,『百濟新撰』にあつたままのものであろうし，あるいはまた，百濟・新羅・任那・高麗などからの外交文書にあつたままを轉載したものであろう。日本人がかれらの發音をきいてかきしるしたという様なケイスは，當時においては（つまり，當時まだ日本人は文字をもたなかつたという狀況からみて）かんがえられない。したがつて，これらの固有名詞は『日本書紀』のなかにあつても，そのまま朝鮮語資料となりうるものである。

ハ，これらの資料が，ある一國，たとえば百濟の記錄からのみとられたというものではなく，やはり，新羅や任那でかかれたものもあつたであろう。これは，人名が唐風にかわる時期が各國においてまちまちであることからかんがえて，やはり各國の言語生活の狀況を忠實に反映しているものと解されるからである。すなわち，半島における文字使用は，當時，すべてのくにでおこなわれていたとみとめられる。これはおそらく，漢代における中國統治の影響で文字使用が半島諸國の爲政者の間に普及していたことをものがたるものであろう。勿論それは，書記のことをつかさどる專門のひとびとの存在を豫想しなければならないかもしれず，またそれが，中國人およびその子孫たちであつたかもしれないのであるが，それはいま問題にしないことにする。

なお朝鮮半島において文字が使用される様になつたことの記錄としては,『三國史記』卷24，濟紀２，近肖古王30年に，「古記云，百濟開國已來未有以文字記事，至是得博士高興始有書記。然高興未嘗顯於他書，不知其何許人也」とある。これは375年のことでどこまで確實かわからないが,『魏志倭人傳』によれば，239年には帶方郡をとおして倭國と魏との文書の交換がすでにあるのであるから，朝鮮半島における文字使用はもつとふるくからあつたものとしてよいのではないだろうか。ことにいま問題にしようとしているのが公式の文書であろうから，やはり漢代よりの文字使用とかんがえておいてよかろうとおもう。

ニ，漢代における中國統治の影響による文字使用の普及という假定からすれば，そこに使用されている漢字が，上古音（Archaic Chinese，漢代音）を基礎にしたものではないかという豫想をおこさせるのであるが，實際にしらべた結果からいえば，中古音（Ancient Chinese，隋唐音）で解釋した方がよいものもあるので，ここでは，その兩方をだして比較勘

案することにした。これは，安易な方法をとるということではなく，當時の朝鮮字音が，上古音と中古音の中間にくらいするという歷史的な事實に對應するための手段であつて，逆にいえば，かえつて當時の朝鮮字音が，この空間をうめてくれるという希望さえももたせるのである。そしてもしわたくしに，南北朝時代における中國音韻史上のもつとゆたかな智識があれば，よりおもしろい問題がひろいだせるのでないかとおもうが，現在の非力をもつてしてはいかんともなしがたい。それはさておき，以下の音價推定には，董同龢氏の「上古音韻表稿」(『歷史語言研究所集刊』第十八本）によることにした。Karlgren 氏の「GRAMMATA SERICA」よりは，この方があたらしい研究成果をとりいれているからである。その推定音價はあくまで中國語のものであつて，朝鮮語としては，その中國語の音價によつてあらわされた差異の種類に對應するところのものをその音韻として設定しなければならない。そこでこの二者を區別するために，朝鮮語の音韻は/　/でくくり，漢字音の音價は〔　〕にいれることにした。

ホ，古代朝鮮語に母音調和があつたかどうかは，しらべてみないとわからないはずであるが，現在の朝鮮語學の定說にしたがつて，當然存在したものとかんがえて，母音組織を考察するばあいのひとつのてがかりとした。

ヘ，いま朝鮮語の音韻組織をみようというのであるが，一體どのくらいのかずの語彙があれば資料としての確實性があるのであろうか。このことについて，大阪大學教授中井喜和博士よりうかがつたことをしるしておきたい。

いまかりに，音韻のかずを20と假定し，１語が２音節からなると假定すると，１語のなかにふたつの音韻がふくまれることになる。そこで，１語のなかに２音ふくまれているとすると，20の音が萬遍なくあらわれるとして，なん語ぐらいあればすべての音はもれなくあらわれるか。

音の種類 20(ai i=1, 2, ……, 20)

１語にふくまれる音節の個數 2

ただし，どんなくみあわせ ai aj の語のでる確率（頻度）も同一とする。１回の試行で特定のS個の音節のあらわれない確率を A_S とすれば，

$$A_S=1\left(-\frac{s}{20}\right)^2$$

xiとして「N個の語をとりだしたとき ai なる音が一度もあらわれない事象」xとして，「すくなくともひとつの i について xi のおきる事象」とすると，x の餘事象がこのましい事象となる。そこで x のおきる $Pr.$ がちいさくなる様にNをとればよい。x のおきる $Pr.$ は，

$$P=20A_1^N-{}_{20}C_2A_2^N+{}_{20}C_3A_3^N\cdots\cdots+(-1)^{r-1}{}_{20}CrA_Y^N+\cdots\cdots$$
$$=20\left(1-\frac{1}{20}\right)^{2N}-{}_{20}C_2\left(1-\frac{2}{20}\right)^{2N}+{}_{20}C_3\left(1-\frac{3}{20}\right)^{2N}\cdots\cdots$$

$N=100$ としてうえの P を評價する。

$${}_{20}Cr<20\times10^{r-1}\quad(r=1,2,\cdots\cdots)$$

$$\left(1-\frac{1}{20}\right)^{200}<10^{-4}\left(1-\frac{2}{20}\right)^{200}<10^{-9}$$

$$\left(1-\frac{r}{20}\right)^{200}<10^{-7}\cdot10^{-r}\quad(r=2,3,\cdots\cdots)$$

ゆえに

$$P<2\times10^{-3}+\sum20\times10^{r-1}\times10^{-7}\times10^{-r}$$
$$\leqq0.002+4\times100\times10^{-8}\leqq0.003$$

したがつて 100も例があれば，すべての音はあらわれているという期待は99.7%以上ということになる。音のかずのよりすくないばあいは，100例よりもすくなくてもいいわけであるし，1語の音節數が2音節よりおおいばあいは，さらに語數はすくなくてもよいわけである。だから，以下にのべるぐらいの語數でも，まつたくあらわれない音があるかもしれないという懸念は，ほとんどないといつてよいわけである。

ト，うえに，1語，あるいは1音節ということをのべたが，固有名詞では，正直のところ，どこまでが1語であるか，どこまでが1音節であるかは，はなはだ曖昧である。ましてわたくしは朝鮮語をしらないのであるから，ますます困難である。そこで用例をひろくながめてみると，漢字2字からなりたつている語が一番普通の様であるので，大體漢字2字をもつて1語とし，3字のものも大體1語とした。しかし3字以上のもので，他と比較してみるとふたつの部分にわけうるものは，それぞれを1語根としてとりあつかうことにした。そして，結果的にではあるが，明確な用例から歸納してえた母音調和の法則をあてはめることによつて，

2語根に分解できるものもある。1語を語根に分解したものには，そのきれめに - をひいた。

2 百濟における音韻組織

イ，資料

百濟語とおもわれるもので，ここにはぶいたものが若干ある。まず，「百濟」という語である。これは『高句麗好太王碑銘』には「百殘」の兩字によつて，これが同一音をあらわそうとしたものであることはわかるが，「タダラ」という語とはどうしてもむすびつかない。金澤庄三郎氏に「日鮮古代地名の研究」(『東アジアの古代文化』1974春收錄) があり，そのなかに，「百濟」は Pak-nara,「百殘」は Pak-tarの表記であるという說がある。きくべき說とはおもうが一應はぶくことにする。つぎに官職名（達率・恩率・德率・奈率など)，行政區劃名（上部・前部・中部・下部・後部・鬼部など）もはぶいた。これらは漢語の影響とみとめられる點もある様でる。それから中國風のなまえもはぶいたのはいうまでもない。百濟で中國風の命名のはじまつたのは，はじめは勿論僧侶からであつたろうが，のちには博士などの學者であつたとおもう。『欽明紀』15年(554)につぎのごとくにある。

二月，百濟遣下部杆率將軍三貴，上部奈率物部烏等乞救兵。仍貢德率東城子莫古代前番奈率東城子言，五經博士王柳貴代固德馬丁安，僧曇惠等九人代僧道深等七人。別奉勅貢易博士施德王道良，歷博士固德王保孫，醫博士奈率王有悛陀，採藥師施德潘量豊，固德丁有陁，樂人施德三斤，季德己麻次，季德進奴，對德進陀。皆依請代之。

このなかの，「王柳貴」「馬丁安」「曇惠」「道深」「王道良「「王保孫」「潘量豊」などは中國風のなまえであろう。そして「王有悛陀」「丁有陁」などは，「王」「丁」は中國風の姓で「有悛陀」「有陁」は百濟名であろうとおもわれる。つまり，漢字を表意的にもちいたものは中國式，表音的にもちいたものは百濟式と一應かんがえるわけである。しかし，その區分はかなり主觀的にならざるをえない。さて，百濟における中國式の命名は，この554年の記錄がまず最初の顯著な例であるから，大略6世紀のなかばからこういう命名が普及したことが察せられる。人名はそういう

$$A_S=1\left(-\frac{s}{20}\right)^2$$

xiとして「N個の語をとりだしたとき ai なる音が一度もあらわれない事象」xとして，「すくなくともひとつの i について xi のおきる事象」とすると，x の餘事象がこのましい事象となる。そこで x のおきる $Pr.$ がちいさくなる様にNをとればよい。x のおきる $Pr.$ は，

$$P=20A_1^N-{}_{20}C_2A_2^N+{}_{20}C_3A_3^N\cdots\cdots+(-1)^{r-1}{}_{20}CrA_Y^N+\cdots\cdots$$
$$=20\left(1-\frac{1}{20}\right)^{2N}-{}_{20}C_2\left(1-\frac{2}{20}\right)^{2N}+{}_{20}C_3\left(1-\frac{3}{20}\right)^{2N}\cdots\cdots$$

$N=100$ としてうえの P を評價する。

$${}_{20}Cr<20\times10^{r-1}\quad(r=1,2,\cdots\cdots)$$

$$\left(1-\frac{1}{20}\right)^{200}<10^{-4}\left(1-\frac{2}{20}\right)^{200}<10^{-9}$$

$$\left(1-\frac{r}{20}\right)^{200}<10^{-7}\cdot10^{-r}\quad(r=2,3,\cdots\cdots)$$

ゆえに

$$P<2\times10^{-3}+\sum20\times10^{r-1}\times10^{-7}\times10^{-r}$$
$$\leqq0.002+4\times100\times10^{-8}\leqq0.003$$

したがつて 100も例があれば，すべての音はあらわれているという期待は99.7%以上ということになる。音のかずのよりすくないばあいは，100例よりもすくなくてもいいわけであるし，1語の音節數が2音節よりおおいばあいは，さらに語數はすくなくてもよいわけである。だから，以下にのべるぐらいの語數でも，まつたくあらわれない音があるかもしれないという懸念は，ほとんどないといつてよいわけである。

ト，うえに，1語，あるいは1音節ということをのべたが，固有名詞では，正直のところ，どこまでが1語であるか，どこまでが1音節であるかは，はなはだ曖昧である。ましてわたくしは朝鮮語をしらないのであるから，ますます困難である。そこで用例をひろくながめてみると，漢字2字からなりたつている語が一番普通の様であるので，大體漢字2字をもつて1語とし，3字のものも大體1語とした。しかし3字以上のもので，他と比較してみるとふたつの部分にわけうるものは，それぞれを1語根としてとりあつかうことにした。そして，結果的にではあるが，明確な用例から歸納してえた母音調和の法則をあてはめることによつて，

2語根に分解できるものもある。1語を語根に分解したものには，そのきれめに－をひいた。

2　百濟における音韻組織

イ，資料

百濟語とおもわれるもので，ここにはぶいたものが若干ある。まず，「百濟」という語である。これは『高句麗好太王碑銘』には「百殘」の兩字によつて，これが同一音をあらわそうとしたものであることはわかるが，「タダラ」という語とはどうしてもむすびつかない。金澤庄三郎氏に「日鮮古代地名の研究」(『東アジアの古代文化』1974春收錄) があり，そのなかに，「百濟」は Pak-nara,「百殘」は Pak-tarの表記であるという說がある。きくべき說とはおもうが一應はぶくことにする。つぎに官職名（達率・恩率・德率・奈率など)，行政區劃名（上部・前部・中部・下部・後部・鬼部など）もはぶいた。これらは漢語の影響とみとめられる點もある様でる。それから中國風のなまえもはぶいたのはいうまでもない。百濟で中國風の命名のはじまつたのは，はじめは勿論僧侶からであつたろうが，のちには博士などの學者であつたとおもう。『欽明紀』15年(554)につぎのごとくにある。

二月，百濟遣下部扞率將軍三貴，上部奈率物部烏等乞救兵。仍貢德率東城子莫古代前番奈率東城子言，五經博士王柳貴代固德馬丁安，僧曇惠等九人代僧道深等七人。別奉勅貢易博士施德王道良，歷博士固德王保孫，醫博士奈率王有悛陀，採藥師施德潘量豊，固德丁有陁，樂人施德三斤，季德己麻次，季德進奴，對德進陀。皆依請代之。

このなかの，「王柳貴」「馬丁安」「曇惠」「道深」「王道良」「王保孫」「潘量豊」などは中國風のなまえであろう。そして「王有悛陀」「丁有陁」などは，「王」「丁」は中國風の姓で「有悛陀」「有陁」は百濟名であろうとおもわれる。つまり，漢字を表意的にもちいたものは中國式，表音的にもちいたものは百濟式と一應かんがえるわけである。しかし，その區分はかなり主觀的にならざるをえない。さて，百濟における中國式の命名は，この554年の記錄がまず最初の顯著な例であるから，大略6世紀のなかばからこういう命名が普及したことが察せられる。人名はそういう

わけで7世紀にもなると資料としての價値がなくなるが，山川國郷のなまえは後世にいたるまでまだまだ舊來のままを保存しているのである。資料としてとりだしたのは，以下の139語である。

いまこれらの諸語を，原文のまま漢字でかき，そのみぎに『上古音韻表稿』の中國上古音をしめした。實際は中古音によつて修正しなければならないのであるが，それはのちにしめすことにする。

久氐(人)	kiwəg tied
彌州流(人)	mier t'iog liog
莫古(人)	mwâk kâg
木羅斤資(人)	mûk lâ kiən tsied
沙沙奴跪(人)	sa sa nâg k'iwa
沙白(人)	sa b'wăk
蓋盧(邑)	kâd lâg
忱彌多禮(人)	tiəm mier tâ lied
貴須(人)	kiwəd siug
意流(地)	·iəg liog
州流須祇(地)	t'iog liog siug g'ieg
比利(邑)	pied lied
辟中(邑)	piek tiong
布彌支(邑)	pwâg mier kieg
半古(邑)	pwân kâg
多沙(城)	tâ sa
谷那(山)	kûk nâ
枕流(人)	tiəm liog
阿花(人)	·â xwăg
辰斯(人)	źiən sieg
木-滿致(人)〔大倭〕	mûk-mwân tied
久尒辛(人)	kiwəg ńier sien
阿直岐(人)	·â d'iək g'ieg
王仁(人)	·iwang ńien
直支(人)	d'iəg kieg
阿知(人)〔使主〕	·â tieg

都加(人)〔使主〕	tâg kâ
盖鹵(人)	kâd lâg
俱知(鳥)〔鷹〕	kiug tieg
新齊都(人)〔媛〕	sien tsied tâg
加須利(人)	kâ siug lied
琨支(人)	kwən kieg
筑足流(城)	tiok tsiug liog
久斯岐(城)	kiwəg sieg g'ieg
久麻那利(人)〔任那の地名とも〕	kiwəg mwa nâ lied
文斤(人)	miwən kiən
汶洲(人)	miwən tiog
昆支(人)	kwən kieg
末多(人)	mwât tâ
適莫尒-解(人)	tiek mwâk ńier keg
古尒-解(人)	kâg ńier keg
莫古-解(人)	mwâk kâg keg
須-流杞(人)	siug-liog kieg
奴-流杞(人)	nâg-liog kieg
麻那(人)	mwa nâ
斯我(人)	sieg ngâ
哆唎(國)	tâ lied
姐彌-文貴(人)	tsiăg mier-miwən kiwəd
己汶(國)	kiəg miwən
意多郎(人)	·iəg tâ liang
斯麻(人)	sieg mwa
帶沙(地)	tâd sa
洲利即尒(人)	tiog lied tsiək ńier
州利即次(人)	tiog lied tsiək ts'ied
沙都(島)	sa tâg
灼-莫古(人)	tiɔk mwâk kâg
汶-慕羅(島)	miwən mwâg lâ
淳陀(人)	źiwən d'ia

賁巴委佐(人)	pwən pwăg ·iwər tsâ
不麻-甲背(人)	piwăg mwa-kap pwăg
彌騰利(人)	mier d'əng lied
尹貴(人)	giwən kiwəd
麻鹵(人)	mwa lâg
己州-己婁(人)	kiəg tiog-kiəg kliug
眞牟貴文(人)	tien miog kiwəd miwən
麻哿牟(人)	mwa kâ miŏg
己知部(人)	kiəg tieg b'wậg
鼻利-莫古(人)	biwəd lied-mwâk kâg
宣文(人)	siwän miwən
昧淳(人)	mwâd źiwən
彌麻沙(人)〔紀臣奈率〕	mier mwa sa
沙宅-己婁(人)	sa d'ăk-kiəg kliug
麻那(人)	mwa nâ
木-尹貴(人)	mûk-giwən kiwəd
阿乇得文(人)	·â tăk tək miwən
哥麻(人)	kâ mwa
哥非(人)	kâ piwəd
眞慕-宣文(人)	tien mwâg-siwän miwən
子言(人)	tsiəg ngiăn
汶休麻那(人)	miwən xiŏg mwa nâ
馬津(城)	mwăg tsien
得尔辛(地)	tək ńier sien
馬次文(人)	mwăg ts'ied miwən
皮久斤(人)	b'iwa kiwăg kiən
灼-干那(人)	tiɔk-kân nâ
今敦(人)	kiəm twən
阿斯比多(人)	·â sieg pied tâ
怒唎斯致契(人)	nâg lied sieg tied kät
次酒(人)	ts'ied tsiŏg
禮-塞敦(人)	lied sək twən

文次(人)	miwən ts'ied
日佐分屋(人)	ɣiwăt tsâ piwən ·ûk
三貴(人)	səm kiwəd
烏(人)	·âg
莫古(人)	mwâk kâg
言(人)	ngiăn
馬武(人)	mwăg miwag
國雖多(人)	kwək siwəd tâ
燕比善那(人)	·iän pied źiän nâ
三斤(人)	səm kiən
己麻次(人)	kiəg mwa ts'ied
進奴(人)	tsien nâg
進陀(人)	tsien d'ia
汶斯干奴(人)	miwən sieg kân nâg
函山(城)	ɣêm sän
苦都(人)	k'âg tâg
谷智(人)	kûk tieg
彌氐(津)	mier tied
居曾(山)	kiag tsâng
德尔(人)	tək ńier
餘怒(人)	diag nâg
哥奴知(人)	kâ nâg tieg
次干德(人)	ts'ied kân tək
首信(人)	śiŏg sien
蓋文(人)	kâd miwən
福富味身(人)	piwək piwăg miwəd sien
太良末太(人)	t'âd liang miwəd t'âd
文賈古-子(人)	miwən kăg kăg-tsiəg
味麻之(人)	miwəd mwa tiəg
素之(人)	sâg tiəg
伊梨一柯須彌(人)	·ied lied-kâ siug mier
伊梨一渠世斯(人)	·ied lied-g'iag śiäd sieg

都須流金流(人)　tâg siug liŏg kiəm liŏg
自斯(人)　dz'ied sieg
意斯(人)　·iəg sieg
怒受利(人)　nâg źiŏg lied
久麻怒利(城)　kiwăg mwa nâg lied
都々岐留(山)　tâg tâg g'ieg liŏg
疏留(城)　sag liŏg
州柔(地)　tiŏg ńiŏg
古連巨涇(川)　kâg liän g'iag kieng
金受(人)　kiəm źiŏg
弖禮(城)　tied lied
枕服岐(城)　tiəm b'iwək g'ieg
谷那(人)　kûk nâ
憶禮(人)　·iəg lied
集斯(人)　dz'iəp sieg
答炑(人)　tĕp pwən
四比福夫(人)　sied pied piwək piwag
末都(人)　mwât tâg

ロ，分布圖

つぎにこれらの漢字音が，同じ子音をよこに，おなじ中心母音をたてに排列してみて，どのような分布をなしているかを圖表にしてみるとつぎのごとくになる。各音みぎしたの數字はその音の使用されたのべ回數をしめす。

·â$_5$	·iän$_1$	·ied$_2$	·ûk$_1$		·âg$_1$	diag$_1$	·iwər$_1$	·iəg$_3$	
kâ$_7$		k̂ieg$_4$	kûk$_3$		kâg$_9$	kiag$_1$	kiwăg$_6$	kiən$_4$	kwən$_2$
kâd$_2$	keg$_3$	kieg$_2$		kliug$_2$			kiwăd$_6$	kiəm$_3$	kwək$_1$
kân$_3$		kieng$_1$		kiug$_1$				kiəg$_6$	
kät$_1$									
kap$_1$									
xwăg$_1$				xiŏg$_1$					
ɣêm$_1$	ɣiwăt$_1$								
ngâ$_1$	ngiăn$_2$								

	k'iwa$_1$				k'âg$_1$				
		g'ieg$_5$				g'iag$_2$	g'iwən$_2$		
sa$_8$	siwän$_2$	sieg$_9$		siug$_6$	sâg$_1$		siwəd$_1$		sâk$_1$
	śiäd$_1$	sien$_4$			sag$_1$				sâm$_2$
		sied$_1$							
		śien$_1$		źiŏg$_1$			źiwən$_2$	źiən$_1$	
				xiŏg$_1$					
tsâ$_2$		tsied$_2$		tsiŏg$_1$		tsiag$_1$		tsiəg$_2$	tsâng$_1$
		tsien$_3$						tsiək$_1$	
		ts'ied$_5$							
		dz'ied$_1$						dz'iəp$_1$	
tâ$_6$	tep$_1$	tied$_5$		tiong$_1$	tâg$_8$			t̂iəm$_3$	tək$_4$
tâd$_1$		t̂ien$_2$		tiok$_1$				t̂iəg$_2$	twăn$_2$
tăk$_1$		t̂iek$_1$		t̂iŏg$_5$					
t'âd$_1$		tieg$_5$		t̂iɔk$_2$					
d'ăk	d'ia$_2$							d'iək$_1$	d'əng$_1$
								d'iəg$_1$	
nâ$_8$		ńier$_5$			nâg$_9$				
		ńien$_1$							
pwân$_1$		pied$_3$		piwag$_1$		pwâg$_2$	piwəd$_1$		pwăn$_3$
		piek$_1$					piwăg$_2$		pwăg$_1$
							piwək$_1$		
							biwəd$_1$		b'wậg$_1$
							b'iwək$_1$		
mwa$_{12}$		mier$_8$	mûk$_3$	miŏg$_2$		mwâg$_2$	miwăn$_{13}$		mwâd$_1$
mwâk$_6$				miwag$_1$			miwəd$_3$		
mwân$_1$									
mwât$_2$									
mwăg$_3$									
lâ$_2$		liang$_1$		liŏg$_{11}$	lâg$_3$				
		lied$_{16}$							
	liän$_1$								

ハ，音韻組織

母音 /a/ についてみると，

母音々節は [·â]$_5$ のみである。

[k] のついた音としては，[kâ]$_7$ があり，[kân]$_3$ [kâd]$_2$ も [-n] [-d] をのぞけば /ka/ にいれてよいであろうし，また，[kät] [kap] もそれぞれ1例のみであり，[-t] [-p] をのぞいてかんがえれば /ka/ にいれてよいとおもわれ，結局 /ka/ の類として 14例をかぞえることができる。

[ngâ]$_1$ [ɣêm]$_1$ [xwăg]$_1$ はそれぞれただ1例のみで1音韻としてたちにくい。

[sa]$_8$ と[tsâ]$_2$ とが同一かいなか問題となるが，他の母音とのくみあわせをみると，/s/ と /ts/とは一應別としておいた方がよいであろうから，[sa] の [a] を [â] と別の母音とすることは無理であろう。これも /a/ のなかにいれる。

[tâ]$_6$ [tâd]$_1$ [tăk]$_1$ [t'âd]$_1$ は /ta/とする。

[d'ăk]$_1$ の [ă] も /a/ にいれる。[d'] が [t] と同一か別かはあとで検討する。

[nâ]$_8$ は /na/ とする。

[pwân]$_1$ にみえる [-w-] は，唇音のためにはいつたものと解する。/pa/ とする。

[mwa]$_{12}$ [mwâk]$_6$ [mwân]$_1$ [mwât]$_2$ における [-w-] は唇音のためにはいつたものとすれば，母音のみのものとなり，[â] が韻尾のついたばあいの音とすれば，これらは同一音としてよいであろう。

[lâ] は /la/ とする。

以上の結果を整理するとつぎの様になる。

/a ka sa tsa ta na pa ma la/

つぎに，[iä] [e] [eg] [i̯wă] [i̯ă] [i̯wä] [i̯äd] [i̯a] [i̯ä] などの [-i-] [-i̯-]をもつ一群についてみるとこれらの中古音はつぎの様になつている。

iä （燕） —ie

e （答） —ə

eg （解） —äi; iĕ

i̯wă （曰） —i̯wɐ

i̯ă （言） —i̯ɐ

i̯wä （宣） —i̯wä

i̯äd （世） —i̯äi

i̯a （良） —i̯a

i̯ä （連，善）—i̯ä

これらは中古音でも/ia/の音をもつものであるから，口蓋化したものともとれるが，一括してしまつて 'e' とも解釋されるとおもわれる。そこで，

/e ke se te le/

という系列があつたものとみておく。ただしこれは勢力のあつたものということはできない。

母音 /i/ についてみる。

この類は [i̯e] の音としてあらわれる。

i̯ed （—i），i̯eg（—iĕ），i̯er（—iĕ）

となつて，中古音では [i] [iĕ] となるがこの區別が音韻的對立として存在していたとは分布上みられないから，同一の音としてあつかう。そうとすればこの音はわりあい簡單にまとめられる。

/i ki si tsi ti ni pi mi li/

母音 [i̯ŏg] [i̯ug] [i̯wag] [u]の關係であるが，中古音では，

i̯ŏg（—i̯əu），iug（—i̯u），i̯wag（—i̯u），û（—u）

となるし，ほとんど相補的な關係にあるからこれらは 'u' として一括してよいであろう。

/u ku su tsu tu nu pu mu lu/

[âg] は中古音で [uo] となるし，各音に分布してあらわれる。/o/とみる。これと關連するのは [ag—i̯wo] [i̯ag—i̯wo] である。これを對比してしめす。

âg$_1$	kâg$_2$ （k'âg をふくむ）	sâg$_1$	tâg$_8$	nâg$_9$	pwâg$_2$	
	ki̯ag$_3$ （g'i̯ag をふくむ）	sag$_1$	tsi̯ag$_1$			
mwâg$_5$	lâg$_2$					
mi̯wag$_1$						

こうしてみると，/i̯wo/ をふくむ音は /k/ /s/ /ts/ のみであるから，

これを一音としてたてるのはむずかしい。/o/ にふくめればつぎのようになる。

/o_1 ko_5 so_2 tso_1 to_8 no_9 po_2 mo_5 lo_2/

[i̯wə] [i̯ə] [wə] [ə] のみつつの母音の關係にうつる。一見して，[i̯wə] と [i̯ə] とが，/k/ /ź/ 以外の音では相補的な分布をしていることがわかる。それでは，[i̯wə] [i̯ə] 對 [ə] の關係で，前後にくる音がおなじばあいにあらわれるのはどうかといえば，したの三對である。

ki̯ĕn (斤)$_4$: kwĕn(昆)$_2$

pi̯wĕg (不)$_2$: pwĕg (背)$_1$

mi̯wĕd(昧)$_3$: mwâd(昧)$_1$

これだけではやや不十分の感はあるが，一應區別のあつたものとみて，[i̯wə] [i̯ə] を /i̯ə/, [ə][wə] を /ə/ としておく。

また一應かんがえておくべきことは，古代においておなじ中心母音をもつていたものが，中古音では分裂してくることである。すなわち，

i̯wəd (鼻，雛) →wi

i̯wən (淳，尹) →i̯wĕn

i̯wər (委) →wiĕ

i̯wĕk (服，福) →i̯uk

i̯wĕg (不，富，久) →i̯ə̯u

i̯wĕd (非，味，貴) →i̯wĕi

i̯wĕn (分，文，汶) →i̯wən

の様になり，/i/ を中心とするものと，/ə/ を中心とするものとにわかれる。また，

ə̂ (曾，騰) →ə

ĕ (三) →ə̆

ə̂ (得，德，塞) →e

wə̂ (國) →uə

wĕ (貴，敦，琨，昆，炑) →uə

wĕg (背) →uə̯i

wĕd (昧) →uə̯i

wə̯̂g (部) →ə̯u

i̯əg (之，己，志，子，意，憶) →i

i̯ə (直，即，忱，今，金，集) →i̯ə

i̯ə (辰) →i̯e

i̯ə (斤) →i̯ĕ

などの變化もあり，中古音を中心として考察すれば，また別の分韻ができるかもしれない。しかし，後述のごとく，母音調和の觀察には上古音の方がわかりやすい様であるから，やはり上古音を中心として，中古音を加味して考察すべきであろう。

つぎに子音にうつる。

/k/ は問題がない。[ɣ] をもつ [ɣêm] (函) は 1 例しかないので/k/ にいれる。

cf.『三國史記』百濟，何老 [ɣâ lôg]＝葛草 [kât ts'ôg'], 甘勿阿 [kâm miwĕt ă]＝咸悅 [ɣəm ji̯wăt]

[xwag] (花) [x'i̯ôg] (休) はそれぞれ1例のみであるから，/k/ のなかにいれる。濁音の [ngâ] (我)$_1$, [g'i̯eg](岐)$_5$ [g'i̯ag](渠)$_2$, [g'i̯wən] (尹)$_2$ は母音 /a i o ə/ にそれぞれ結合しているから，/g/ としてたててもよいかもしれないが，『三國史記』百濟に，伎伐(浦) [g'i̯eg b'i̯wăt]＝只火(浦) [k̂i̯eg xuər], 仇知 [g'i̯ôg ti̯eg]＝金池 [ki̯əm d'i̯a], 仇知只 [g'i̯ôg ti̯eg k̂i̯eg]＝金滿 [ki̯əm mwân] の例からみれば，g'＝k̂＝k とみることができよう。

/s/ と /ts/ とは別の音韻としてたててきたのであるが，

/sa_8 se_2 si_{15} su_6 so_2 $si̯ə_4$ $sə_3$/

/tsa_2 tsi_{11} tsu_3 tso_1 $tsi̯ə_4$ $tsə_1$/

という對立からみても妥當であろう。[ź] は /s/ のなかにいれるべきであろう。

/t/ は問題なく，/d/ もこれにいれる。

/n/ も問題ない。

/p/ /m/ /l/ なども問題ない。

以上をまとめれば子音としては，

k s ts t n p m l

となる。

つぎに語末音について考察する。

前掲諸語の語末音（一應各語を分解しないで，みかけの一語をそのまま一箇の語とする）を上記の整理の結果によつてまとめてみると，つぎの様になる。

i 終止	42
a 終止	23
o 終止	16
u 終止	15
ə 終止	11
e 終止	5
n 終止	20
k 終止	3
t 終止	1
m終止	1

こうしてみると，ほとんどが母音終止であつて，子音終止のうち，有意味的にかんがえられるのは，-n のみであろう。これは確実に［-n］であつたということではなく，音韻的に一子音 /n/ で終止するとみとめられたものがあつたと理解しておいてよいであろう。

これをもうすこし發展させてかんがえてみて，語中のばあいにも，子音終止の字がつかつてあるばあいには，そのあとに母音をおぎなつてかんがえることにする。すなわち，古代日本の地名において，

信濃 sin(a)no

男信 nam(a)sin(a)

（本居宣長『地名字音轉用例』 東條義門『男信』など）

とかいたようなものである。いまその母音を /ɸ/ であらわす。

なお，前字の末尾子音が後字の頭子音とおなじばあいには，その末尾子音の表記は後字の頭子音をあらわそうとしたものと解して，子音はひとつとかんがえることにする。たとえば，

莫古 mak ko＞mako

の様なものである。ただし，/n/ は一音とかんがえるので，

進奴 tsin no

とするが，-m, -ng は /n/ のなかにふくめる。

ニ，推定復原語形

以上の考察をへて，資料とした諸語を音韻的に整理したかたちでしめせばつぎのごとくになる。

久氐(人)	kiə ti
彌州流(人)	mi-tu lu
莫古(人)	ma ko
木羅斤資(人)	mu kɸ la-kiən tsi
沙沙奴跪(人)	sa sa no ke
沙白(人)	sa pa kɸ
蓋盧(邑)	ka lo
忱彌多禮(人)	tiə mi-ta li
貴須(人)	kiə su
意流(地)	iə lu
州流須祇(地)	tu lu su ki
比利(邑)	pi li
辟中(邑)	pi kɸ tu
布彌支(邑)	po mi ki
半古(邑)	pa nɸ ko
多沙(城)	ta sa
谷那(山)	ku kɸ na
枕流(人)	tiə lu
阿花(人)	a ka
辰斯(人)	siə nɸ si
木-滿致(人)	mu kɸ-man ti
久尓辛(人)	kiə ni sin
阿直岐(人)	a-tiə ki
直支(人)	tiə ki
阿知(人)	a ti
都加(人)	to ka
盖鹵(人)	ka lo
俱知(鳥)	ku ti
新齊都(人)	si nɸ tsi to

加須利(人)	ka su li
琨支(人)	kə nɸ ki
筑足流(城)	tu kɸ tsi lu
久斯岐(城)	kɨə si ki
久麻那利(人)	kɨə ma na li
文斤(人)	mɨə nɸ kɨən
汶洲(人)	mɨə nɸ tsu
昆支(人)	kə nɸ ki
末多(人)	ma ta
適莫尓-解(人)	ti kɸ ma kɸ ni-ke
古尓-解(人)	ko ni-ke
莫古-解(人)	ma ko-ke
須-流枳(人)	su-lu ki
奴-流枳(人)	no-lu ki
麻那(人)	ma na
斯我(人)	si ka
哆唎(國)	ta li
姐彌-文貴(人)	tso mi-mɨən kɨə
己汶(國)	kɨə mɨən
意多郎	·ɨə ta len
斯麻(人)	si ma
帶沙(地)	ta sa
洲利即尓(人)	tu li tsɨə kɸ ni
州利即次(人)	tu li tsɨə kɸ tsi
沙都(島)	sa to
灼-莫古(人)	te kɸ-ma ko
汶-慕羅(島)	mɨən-mo la
淳陀(人)	sɨə nɸ te
賁巴委佐(人)	pə nɸ po ɨə tsa
不麻-甲背(人)	pɨə ma-ka pə
彌騰利(人)	mi tə nɸ li
尹貴(人)	kɨə nɸ kɨə

麻鹵(人)	ma lo
己州-己婁(人)	kɨə tsu-kɨə lu
眞牟貴文(人)	tin mu kɨə mɨən
麻弩牟(人)	ma ka mu
己知部(人)	kɨə ti pə
鼻利-莫古(人)	pɨə li-ma ko
宣文(人)	se nɸ mɨən
昧淳(人)	mə sɨən
彌麻沙(人)	mi ma sa
沙宅-己婁(人)	sa ta(k)-kɨə lu [takのkはしたのkをみちびきだすためのものか]
麻那(人)	ma na
木-尹貴(人)	mu kɸ-kɨən kɨə
阿乇得文(人)	a ta kɸ tə kɸ mɨən
哥麻(人)	ka ma
哥非(人)	ka pɨə
眞慕-宣文(人)	ti nɸ mo-se nɸ mɨən
子言(人)	tsɨə ken
汶休麻那(人)	mɨə nɸ ku ma na
馬津(城)	ma tsin
得尓辛(地)	tə kɸ ni sin
馬次文(人)	ma tsi mɨən
皮久斤(人)	pe kɨə kɨən
灼-干那(人)	tukɸ-ka na [tukのkはしたのkをみちびきだすためのものとも]
今敦(人)	kɨə nɸ tən
阿斯比多(人)	a si pi ta
怒唎斯致契(人)	no li si ti ka tɸ
次酒(人)	tsi tsu
禮-塞敦(人)	li-sə kɸ tən [禮は漢語であろう。語頭に1音がくるのはこの語のみ]
文次(人)	mɨə nɸ tsi
日佐分屋(人)	ke tsa pɨə nɸ u kɸ
三貴(人)	sə mɸ kɨə
烏(人)	o

言(人)	ken
馬武(人)	ma mu
國雖多(人)	kə kɸ siə ta
燕比善那(人)	en pi se na
三斤(人)	sə mɸ kiən
己麻次(人)	kiə ma tsi
進奴(人)	tsi nɸ no
進陀(人)	tsi nɸ te
汶斯干奴(人)	miən si kan no
函(山)(城)[山も表意か]	kan (san)
苦都(人)	ko to
谷智(人)	ku kɸ ti [苦都と同一人とする]
彌氐(津)	mi ti
居曾(山)	ke tsən
德禾(人)	tə kɸ ni
餘怒(人)	o no [余 diag→iwo となるから，io とかんがえられるが，他との關係で o とおく]
哥奴知(人)	ka no ti
次干德(人)	tsi ka nɸ tə kɸ
首信(人)	su sin
蓋文(人)	ka miən
福富味身(人)	piə kɸ piə miə sin
太良末太(人)	ta le nɸ miə ta
文賈古-子(人)	miən ka ko-tsiə
味麻之(人)	miə ma tiə
素之(人)	so tiə
伊梨-柯須彌(人)	i li-ka su mi
伊梨-渠世斯(人)	i li-ke se si
都須流金流(人)	to su lu kiə mɸ lu
自斯(人)	tsi si
意斯(人)	iə si
怒受利(人)	no su li
久麻怒利(城)	kiə ma no li

都々岐留(山)	to to ki lu
疏留(城)	so lu
州柔(地)	tu nu
古連巨涇(川)	ko le nɸ ke kin
金受(人)	kiə mɸ su
弖禮(城)	ti li
枕服岐(城)	tiə mɸ piə ki [あるいは tiə piə ki かも]
谷那(人)	ku kɸ na
憶禮(人)	iə li
集斯(人)	tsiə pɸ si
答炑(人)	te pən
四比福夫(人)	si pi piə kɸ pu
末都(人)	ma to

ホ，母音調和

古代朝鮮半島の諸語に母音調和があつたということはまず確實だとおもわれる。その際他のアルタイ諸語にみられるように，2くみ乃至3くみの母音にわかれ，その各くみ内における母音のみにより1語乃至1語幹を形成するという想定はおおむね妥當であろうとおもう。そのめでこれらの語を構成する母音をながめてみるとき，やはりそれらしい形跡を發見することはできる。結論的にいつて，一番問題になる音は中舌母音の /ə/ であろう。たとえば，

己汶 /kiə miən/
昧淳 /mə siən/
三斤 /sə mɸ kiən/

などの例をみると，やはり /ə/ /iə/ を一群の母音とする母音調和が存在していたとおもわれるし，これに對し，

莫古 /ma ko/
蓋盧 /ka lo/
多沙 /ta sa/
阿花 /a ka/
哥麻 /ka ma/

馬武 /ma mo/
都加 /to ka/

などの例をみれば，ここにも母音調和らしいものをみることができる。そこで，一應母音調和は存在したとし，できるかぎりそのあとをいかすようにして語構成をかんがえてみて，それに反するものは二語に分解するようにする。そうして一語素の母音のくみあわせをしらべてみると，つぎのようになる。

前項 / 後項	a	e	i	o	u	ə	i̯ə	ɸ	n
a	16	2	9	14	4	2	4	6	2
e	2	2	2	0	0	2	3	5	3
i	7	2	14	2	4	2	4	6	3
o	2	2	8	3	3	0	2	0	0
u	1	0	10	0	5	0	2	8	0
ə	0	0	3	1	0	0	3	11	2
i̯ə	9	1	14	0	8	1	7	16	7
ɸ	4	0	5	0	3	2	3	0	0
n	1	1	6	2	2	0	2	0	0

この表は母音結合の傾向をみるという意味しかもつていない。というのは，/ɸ/ という不明の音を設定しなければならなかつたことと，/n/ という音が語中にきたばあい，それで語素がきれるのかいなかという疑問がのこるし，三音節で一語をなすばあいの配慮がなされていないからである。たとえば

今敦 /ki̯ən tən/ か /ki̯ə mɸ tən/ か，
三貴 /sə mɸ ki̯ə/ か /sən ki̯ə/ か，
國雖多 /kə kɸ si̯ə-ta/
即爾，即次 /tsi̯ə kɸ ni, tsi̯ə kɸ tsi/
福富味身 /pi̯ə kɸ pi̯ə mi̯ə sin/

集斯 /tsi̯ə pɸ si/

などにあらわれる /ɸ/ は，/i̯ə/, /ə/ をあらわす可能性がおおいであろうが，そのことはこの表にはあらわれてこない。また，/a/ と /i̯ə/との結合がかなりの數にのぼるが，これなども語構成の問題を考慮にいれればかなりのものが消去されるであろう。語構成の問題はまだ今後の研究の進展をまたねばならないが，ここにみうるかぎりでは，母音調和のはたらく範圍は語素の內部のみであるようで，外部にまではたらくかいなかは不明である。これらの條件を考慮にいれてみれば，どの母音とどの母音とがむすびつきやすかつたかはいえる様である。すなわち，

/a/ は /a, i, o/ とむすびつきやすい。
/e/ は顯著な特徵はみられない。中性の様である。
/i/ は /a, i/ とむすびつきやすい。
/o/ は /i/ とむすびつきやすい。
/u/ は /i, u/ とむすびつきやすい。
/ə/ は /i, i̯ə/ とむすびつきやすい。
/i̯ə/ は /a, i, u, i̯ə/ とむすびつきやすい。

ということになり，

/a, o/ を一類
/u, i̯ə, ə/ を一類
/i, e/ を一類

としたらどうであろうか。

3 任那および伴跛國における音韻組織

任那は日本にもつともちかく，日本の勢力下にあつたくにであるから，日本語との關係もある程度考慮にいれなければならないであろう。『欽明紀』23年(562)に，

惣言任那，別言，加羅國・安羅國・斯二岐國・多羅國・卒麻國・古嗟國・子他國・散半下國・乞飡國・稔禮國・合十國。

とあり，かなり小國にわかれおり，それだけに言語事情も複雜であつたろうとおもわれるが，ここでは一括してあつかうことにする。

伴跛國は，任那の北西，百濟・新羅との境界にあつたくにで，三國に

かこまれていたが，繼體天皇7(513)年ごろ，にわかに强大となつたが，またたくまに衰亡した。『日本書紀』にのせる伴跛の語彙は後掲の9語である。これを任那と一括してあつかう。

ただし，兩國とも日本語とみとめられた語は《 》でくくつて考察からはずした。

イ，資料

于斯岐-阿利叱智（干岐）ɣiwag siɐg g'iɐg- ·â liɐd t'iɐt tiɐg
《意富》加羅（國）《———》kâ lâ
［「意富」は日本語「大」ならん］
彌摩那(國) miɐr mwa nâ
喙淳(國) lûk źiwən
卓淳(國) tɔk źiwən
［任那之別種也］
末錦(旱岐) mwât kiəm
既殿至(人) kiəd tiən tîed
己本(旱岐) kiəg pwən
百久至(人) pwăk kiwăg tîed
阿首至(人) ·â xiŏg tîed
國沙利(人) kwăk sa liɐd
伊羅麻首(人) ·iɐd lâ mwa xiŏg
尒汶至(人) ńiɐr miwən tîed
左魯-那奇(人) tsâ lâg-nâ kia
他甲背(人) t'â kap siɔg
(上)哆唎(縣) tâ liɐd
(下)哆唎(縣) ———
娑陀(縣) sâ d'ia
牟婁(縣) miŏg kliug
安羅(國) ·ân lâ
辛已奚(人) siɐn ·iwər ɣieg
喙己呑(國) lûk kiəg t'ən
己能末多(干岐) kiəg nâg mwât tâ
阿利斯等(人) ·â liɐd siɐg tâg

己富利知伽(人) kiəg piwăg liɐd tiɐg kia
久斯-《牟羅》(地) kiwăg siɐg《———》
己叱己利(城) kiəg t'iɐt kiəg liɐd
多多羅(原) tâ tâ lâ
金官(村) kiəm kwân
背伐(村) pwăg b'iwăt
貴智(村) piwəd tiɐg
安多(村) ·ân tâ
委陀(村) ·iwər d'ia
須那羅(村) siug nâ lâ
和多(村) ɣwâ tâ
久斯—《牟羅》(地) kiwăg siɐg《———》
伊斯枳—《牟羅》(城) ·iɐd siɐg kiɐg《———》
背評(地)[亦名能備己富里] pwăg b'iĕng
能備《己富里》(地) nâg b'iwəg《kiəg piwăg liəg》
久禮—《牟羅》(城) kiwăg lied《———》
騰利枳—《牟羅》(城) d'âng liɐd kiɐg《———》
布那—《牟羅》(城) pwâg nâ《———》
牟雌枳—《牟羅》(城) miŏg tsiɐg kiɐg《———》
阿夫羅(城) ·â piwag lâ
久知波多枳(城) kiwăg tiɐg pwă tâ kiɐg
阿利斯等(人) ·â liɐd siɐg tâg
《吉備韓子》那多利斯布利(人) 《———》nâ tâ liɐd siɐg pwâg liɐd
久禮斯己母(人) kiwăg lied siɐg kiəg mậg
奴須久利(人) nâg siug kiwăg liɐd
(安羅次旱岐)夷呑溪(人) (———) diɐd t'ân ɣieg
(安羅下旱岐)大不孫 (———) d'âd piwăg swən
久取柔利(人) kiwăg ts'iug ńiŏg liɐd
(加羅上首位)古殿溪(人) (———) kâg tiən ɣieg
率麻(旱岐) swət mwa
(下部中佐平)麻鹵 (———) mwa lâg
(城方甲)肖時奴 (———) siɔg mwâd nâg

(阿賢)移那斯　(———) dia nâ sieg
(佐魯)麻都　(———) mwa tâg
久禮(山)　kiwăg lied
函跋(旱岐)(人)　ɣêm pwâ
［喙國人］
阿鹵(旱岐)(人)　â lâg
(多羅二首位)訖乾智(人)　(———) kiət g'ian tieg
斯二岐(國)　sieg ńied g'ieg
多羅(國)　tâ lâ
子他(旱岐)　tsiəg t'â
久嵯(旱岐)　kiwăg dz'â
古嗟(國)　kâg tsâ
散半下(國)　sân pwân ɣăg
乞飡(國)　k'iət swən
稔禮(國)　ńiəm lied
(喙部大舍)首智買(人)　(———) xiŏg tieg meg
(習部大舍)親智-周智　(———) ts'ien tieg-tiŏg tieg
(達率)奈末智　(———) nâd mât tieg
(達率)奈末遲　(———) nâd mât d'ied
堪遲(大舍)　k'ăm d'ied
(伴跋國)
伴跋(國)　b'wân pwâ
旣殿溪(人)　kiəd tiən ɣieg
竹汶至(人)　tiok miwən tied
戢支(人)　tsəp kieg (tsəp→tsiəp)
子呑一帶沙(地)　tsiəg t'ân-tâd sa
滿溪(地)　mwân ɣieg
尔列比(地)　ńier liat pied
麻須比(地)　mwa siug pied
麻且奚推封(地)　mwa tsiag ɣieg t'wâd piung

ㅁ, 分布圖

·â$_6$		ied$_2$			iwər$_3$		
ân$_2$	dia$_1$	died$_1$					
kâ$_1$	kia$_2$	kieg$_4$		kâg$_2$	kiwăg$_{10}$	kiəm$_2$	kwâk$_1$
kâp$_1$		kieg$_1$				kiəd$_2$	
kwân$_1$						kiəg$_6$	
ɣêm$_1$	ɣăg$_1$	ɣieg$_6$				kiət$_1$	
ɣwâ$_1$			ɣiwag$_1$			k'iət$_1$	k'ăm$_1$
	g'ian$_1$	g'ieg$_1$					
sa$_2$		sien$_1$	siɔg$_2$				swən$_2$
sâ$_1$		sieg$_9$	siug$_3$				swət$_1$
sân$_1$			xiŏg$_3$		źiwən$_2$		
tsâ$_2$	tsiag$_1$	tsieg$_1$				tsiəg$_2$	tsəp$_1$
dz'â$_1$		ts'ien$_1$					
tâ$_8$		tied$_5$	tiŏg$_1$	tâg$_1$		tiən$_2$	tâg$_2$
tâd$_1$		t'iet$_2$	tiok$_1$	tɔk$_1$			
t'â$_3$		tieg$_8$					t'wâd$_1$
							t'ân$_3$
d'âd$_1$	d'ia$_2$	d'ied$_3$					d'âng$_1$
nâ$_6$		ńier$_2$	ńiŏg$_1$	nâg$_2$		ńiəm	nâg$_2$
nâd$_1$		ńied$_1$					
pwâ$_2$	piwag$_1$	pied$_2$	piung$_1$	pwâg$_1$	piwăg$_3$		pwăn$_1$
pwân$_1$					piwăd$_1$		pwăg$_2$
pwâg$_1$							
pwă$_1$							
pwăk$_1$							
b'wân$_1$	b'iwăt$_1$	b'iĕng$_1$			b'iwăg$_1$		
mwa$_7$	meg$_1$	mier$_1$	miŏg$_2$		miwăn$_2$		mậg$_1$
mwân$_1$							
mwât$_2$							mwâd$_1$
mât$_1$							
lâ$_7$	liat$_1$	lied$_{15}$	lûk$_2$	lâg$_3$			
		lied$_1$	kliug$_1$				

ハ，音韻組織

母音

/a/ に屬するのは [â] [a] [wâ] [wa] [ê] としてよかろう。[â] 以外は一音韻としての獨立性にとぼしい。

/i/ に屬するのは，[i̯e] [ie] であろう。

[i̯a] は一音韻としてみとめてよいようである。すなわち，

[di̯a$_1$ ki̯a$_2$ ɣăg$_1$ g'i̯an$_1$ tsi̯ag$_1$ d'i̯a$_2$ pi̯wag$_1$ b'i̯wăt$_1$ meg$_1$ liat$_1$]

における母音を，

/di̯a　ki̯a　tsi̯a　ti̯a　pi̯a　me　lia/

と解し，さらに

/e　ke　tse　te　pe　me　le/

とすれば，音韻 /e/ をもうけることは妥當であろう。

他國で /o/ と解される [âg] は，ここでは，

[kâg$_2$ tâg$_1$ tɔk$_1$ nâg$_2$ pwâg$_1$ lâg$_3$]

しかなく，それほど勢力のあつたものではないが，一應存在をみとめてよかろう。

[i̯ɔ] [i̯ŏ] [i̯u] はそれぞれ中古音では，

i̯ɔ → i̯äu　　i̯wag → i̯u

i̯ŏ → i̯ău

i̯u → i̯u

となつており，/u/ としてまとめられよう。とすれば，

/su tu nu pu mu lu/

がみいだされる。

[i̯wə] と [i̯ə] とは，[ki̯wăg]（久）と [ki̯əg]（己）の對立をのぞいて他はすべて相補的關係にあるから，これらは同一音韻 /i̯ə/ とする。これらと [wâ] [ə] [â] との關係は，

ki̯əm（金）：k'ăm(堪)

źi̯wən(淳)：swăn(孫，飡)

ti̯ən（殿）：t'ân（呑）

pi̯wăg(不，富)：pwăg(背)

のごとく對立するとみとめられるので，別音とする。

子音については，有聲：無聲，有氣：無氣の對立はなかつた様であるから，

/k s ts t n p m l/

のやつつがたてられる。

末尾子音は百濟のばあいに準じて整理すればつぎのごとくになる。

-n　6

-m　1

-t　1

-ng　2

これからみると，やはり /-n/ 以外のものはみとめることが困難な様である。

ニ，推定復原語形

于斯岐-阿利叱智（干岐）	u si ki-a li si ti
《意富》加羅（國）	《一》ka la
彌摩那(國)	mi ma na
咯淳(國)	lu kɸ źi̯ən
卓淳(國)	to kɸ źi̯ən
末錦(旱岐)[末は意味的用法かも]	ma tɸ ki̯ən
旣殿至(人)	ki̯ə ti̯ə nɸ ti
己本(旱岐)	ki̯ə pən
百久至(人)	pa ki̯ə ti
阿首至(人)	a su ti
國沙利(人)	kə kɸ sa li
伊羅麻首(人)	i la ma su
尒汶至(人)	ni mi̯ə nɸ ti
左魯那奇(人)	tsa lo na ke
他甲肖(人)	ta ka pɸ su
哆唎	ta li
娑陀(縣)	sa te
牟婁(縣)	mu lu
安羅(國)	a nɸ la

辛己奚(人)	si nɸ i̯ə ki
喙己呑(國)	lu ki̯ə tən
己能末多(干岐)	ki̯ə nə ma ta
阿利斯等(人)	a li si tə
己富利知伽(人)	ki̯ə pi̯ə li ti ke
久斯-《牟羅》(地)	ki̯ə si
己叱己利(城)	ki̯ə tsi ki̯ə li
多多羅(原)	ta ta la
金官(村)	ki̯ə mɸ kan
背伐(村)	pə be tɸ
費智(村)	pi̯ə ti
安多(村)	a nɸ ta
委陀(村)	i̯ə de
須那羅(村)	su na la
和多(村)	a ta
伊斯枳-《牟羅》(城)	i si ki
背評(地)	pə pin
能備《己富里》(地)	nə pi̯ə
久禮-《牟羅》(城)	ki̯ə li
騰利枳-《牟羅》(城)	tə nɸ li ki
布那-《牟羅》(城)	po na
牟雌枳-《牟羅》(城)	mu tsi ki
阿夫羅(城)	a pu la
久知波多枳(城)	ki̯ə ti pa ta ki
《吉備韓子》那多利斯布利(人)	na ta li si po li
久禮斯己母(人)	ki̯ə li si ki̯ə mə
奴須久利(人)	no su ki̯ə li
(安羅次旱岐)夷呑溪(人)	i̯ tə nɸ ki
(安羅下旱岐)大不孫	ta pi̯ə sən
久取柔利(人)	ki̯ə tsu nu li
(加羅上首位)古殿溪(人)	ko ti̯ə nɸ ki
率麻(旱岐)	sə tɸ ma

(下部中佐平)麻鹵	ma lo
(城方甲)肖昧奴	su mə no
(阿賢)移那斯	i na si
(佐魯)麻都	ma to
久禮(山)	ki̯ə li
函跛(旱岐)(人)	ka nɸ pa
[喙國人]	
阿鹵(旱岐)(人)	a lo
(多羅二首位)訖乾智(人)	ki̯ə tɸ ke nɸ ti
斯二岐(國)	si ni ki
多羅(國)	ta la
子他(旱岐)	tsi ta
久嵯(旱岐)	ki̯ə tsa
古嗟(國)	ko tsa
散半下(國)	sa nɸ pa nɸ ka
乞飡(國)	ki̯ə tɸ sən
稔禮(國)	ni̯ə nɸ li
(喙部大舍)首智買(人)	su ti me
(習部大舍)親智-周智	tsi nɸ ti-tu ti
(達率)奈末智	na ma ti
(達率)奈末遲	na ma ti
堪遲(大舍)	kə nɸ ti
(伴跛國)	
伴跛(國)	pa nɸ pa
旣殿溪	ki̯ə ti̯ə nɸ ki
竹汶至	tu kɸ mi̯ə nɸ tsi
戢支	tsə ki
子呑-帶沙	tsi̯ə tən-ta sa
滿溪(人)	ma nɸ ki
尒列比(人)	ni le tɸ pi
麻-須比(人)	ma-su pi
麻-且奚-推討(人)	ma-tsu ki-tə pin

ホ，母音調和

百濟にならつて /iə/ /ə/ を中心として母音構成をみよう。

己本 /kiə pən/

能備 /nə piə/

のようにこれらの母音だけで語を構成しているものは問題ない。/i/ との結合もおおくみられる。

既殿至 /kiə tiə nɸ tsi/

尓汶至 /ni miə nɸ tsi/

辛己奚 /si nɸ iə ki/

久斯 /kiə si/

己叱己利 /kiə tsi kiə li/

費智 /piə ti/

久斯 /kiə si/

背評 /pə pin/

久禮 /kiə li/

騰利技 /tə nɸ li ki/

久禮斯-己母 /kiə li si-kiə mə/

夷呑溪 /i tə nɸ ki/

稔禮 /niə nɸ li/

堪遲 /kə nɸ ti/

既殿溪 /kiə tiə nɸ ki/

戢支 /tsə ki/

また，母音の結合をてがかりとして語を語素にきつてみれば，母音調和の規則に違反しないものがある。これは，資料が固有名詞であるため，人名などのばあいには姓と名とに分解できるのであろうし，地名などのばあいには二語以上の結合ということがかんがえられるから，妥當性があるといえよう。

百久至 /pa-kiə tsi/

國沙利 /kə kɸ-sa li/

喙己呑 /lu kɸ-iə tən/

己能末多 /kiə nə-ma ta/

阿利斯等 /a li-si tə/

己富利知伽 /kiə piə li-ti ke/

久知波多枳 /kiə ti-pa ta ki/

奴須久利 /no su-kiə li/

大不孫 /ta-piə sən/

古殿溪 /ko-tiə nɸ ki/

訖乾智 /kiə tɸ-ke nɸ ti/

竹汶至 /tu kɸ-miə nɸ tsi/

子呑帶沙 /tsiə tən-ta sa/

麻且奚推討 /ma tsu ki-tə pin/

このようにしてもまだ疑問としてのこるものはある。

卓淳 /to kɸ ziən/

末錦 /ma tɸ kiən/

金官 /kiə nɸ kan/

背伐 /pə be tɸ/

委陀 /iə de/

久嵯 /kiə tsa/

このうち，卓淳，末錦，金官は漢語の可能性もあり，背伐，委陀の二語は /e/ を中性母音とみれば問題はなくなり，久嵯のみは不明ということになる。とすれば，任那においては，

(1) a o u

(2) iə ə

(3) i e

の三系列の母音調和をなしていたといえよう。

4 新羅の音韻組織

新羅は百濟よりもふるくから日本と交通があつたらしいので，その語もふるくからみえる。

イ，資料

知古	tieg kâg
阿利那禮(河)	·â lied nâ lied
波沙寢錦(王)	pwâ sa miwəd kiəm

ホ，母音調和

百濟にならつて /iə/ /ə/ を中心として母音構成をみよう。

己本 /kiə pən/
能備 /nə piə/

のようにこれらの母音だけで語を構成しているものは問題ない。/i/ との結合もおおくみられる。

既殿至 /kiə tiə nɸ tsi/
尓汶至 /ni miə nɸ tsi/
辛己奚 /si nɸ iə ki/
久斯 /kiə si/
己叱己利 /kiə tsi kiə li/
費智 /piə ti/
久斯 /kiə si/
背評 /pə pin/
久禮 /kiə li/
騰利技 /tə nɸ li ki/
久禮斯-己母 /kiə li si-kiə mə/
夷呑溪 /i tə nɸ ki/
稔禮 /niə nɸ li/
堪遲 /kə nɸ ti/
既殿溪 /kiə tiə nɸ ki/
戢支 /tsə ki/

また，母音の結合をてがかりとして語を語素にきつてみれば，母音調和の規則に違反しないものがある。これは，資料が固有名詞であるため，人名などのばあいには姓と名とに分解できるのであろうし，地名などのばあいには二語以上の結合ということがかんがえられるから，妥當性があるといえよう。

百久至 /pa-kiə tsi/
國沙利 /kə kɸ-sa li/
喙己呑 /lu kɸ-iə tən/
己能末多 /kiə nə-ma ta/
阿利斯等 /a li-si tə/

己富利知伽 /kiə piə li-ti ke/
久知波多枳 /kiə ti-pa ta ki/
奴須久利 /no su-kiə li/
大不孫 /ta-piə sən/
古殿溪 /ko-tiə nɸ ki/
訖乾智 /kiə tɸ-ke nɸ ti/
竹汶至 /tu kɸ-miə nɸ tsi/
子呑帶沙 /tsiə tən-ta sa/
麻且奚推討 /ma tsu ki-tə pin/

このようにしてもまだ疑問としてのこるものはある。

卓淳 /to kɸ ziən/
末錦 /ma tɸ kiən/
金官 /kiə nɸ kan/
背伐 /pə be tɸ/
委陀 /iə de/
久嵯 /kiə tsa/

このうち，卓淳，末錦，金官は漢語の可能性もあり，背伐，委陀の二語は /e/ を中性母音とみれば問題はなくなり，久嵯のみは不明ということになる。とすれば，任那においては，

(1) a o u
(2) iə ə
(3) i e

の三系列の母音調和をなしていたといえよう。

4 新羅の音韻組織

新羅は百濟よりもふるくから日本と交通があつたらしいので，その語もふるくからみえる。

イ，資料

知古	tieg kâg
阿利那禮(河)	·â lied nâ lied
波沙寢錦(王)	pwâ sa miwəd kiəm

微叱-許智(伐旱)	miwəd t'iet-xiag tieg
許智(伐旱)	
微叱(旱岐)	
微叱-己知-波珍(干岐)	miwəd t'iet-kiəg tieg-pwâ tien
宇流助富利智干	ɣiwag liŏg dz'ag piwəg lied tieg kân
汙禮斯伐	·wâg lied sieg b'iwat
毛麻利叱智	môg mwa lied t'iet tieg
富羅母智	piwəg lâ mwâg tieg
蹈輔(津)	d'ôg b'wəg
草羅(城)	ts'ôg lâ
沙比(地名)	sa pied
斯羅	sieg lâ
汶得至(人)	miwən tək tied
刀伽(城)	tôg kia
古跛(城)	kâg pwâ
布那-牟羅(城)	pwâg nâ-miŏg lâ
夫智奈麻禮(人)	piwag tieg nâd mwâ lied
奚-奈麻禮(人)	ɣieg-nâ mwa lied
佐利遲(王)	tsâ lied d'ied
久遲布禮(人)	kiwəg d'ied pwâg lied
[一本云，久禮尓師知干-奈師磨里]	[kiwəg lied ńier sed tieg kân-nâd sed mwa liəg]
伊叱夫禮智(干岐)	·ied t'iet piwag lied tieg
伊叱夫禮知(奈末)	·ied t'iet piwag lied tieg
牛頭方(地)	ngiwəg d'ûg-piwang
尼彌方(地)	nied mier-piwang
汶休帶(山)	miwən xiŏg tâd
久陁-牟羅(地)	kiwəg d'ia-miŏg lâ
彌至己知(奈末)	mier tied kiəg tieg
久禮叱及(伐干)	kiwəg lied t'iet g'iəp
奴氐(大舍)	nâg tied
阿羅波斯(山)	·a lâ pwâ sieg

久須尼自利	kiwəg siug ńied dz'ied lied
[此新羅語未詳也]	
未叱子-失消(弔使)	miwəd t'iet tsiəg-śiet siɔg
多々羅(地)	tâ tâ lâ
須-奈羅または素-奈羅(地)	siug-nâ lâ　　sâg-nâ lâ
和陀または委陀(地)	ɣwa d'ia　　·iwər d'ia
癸鬼または弗知鬼(地)	kiwed kiwəd　　piwət tieg kiwəd
枳叱政(奈末)	kieg t'iet tieng
安刀(奈末)	·ân tôg
失消(奈末)	śiet siɔg
阿羅(地)	·a lâ
(沙喙部奈夫)竹世士(人)	(————) tiok śiäd dz'əg
(沙喙部奈末)北叱智(奈末)	(————) pwək t'iet tieg
伊彌買	·ied mier meg
智洗尓または智洗遲(人)	tieg sien ńier　　tieg sien d'ied
知萬(沙飡)	tieg miwăn(————)
(及飡)彌武	(————) mier miwag
沙鼻岐(城)	sa b'iwəd g'ieg
奴(江城)	nâg
(奈末)加良井山(人)	(————) kâ liang tsieng sän
(奈末)被珍那(人)	(————) b'iwa tien nâ
(奈末)甘勿那	(————) kam miwət nâ
(大奈末)考那	(————) kɔg nâ
伐旱(伐干)	b'iwăt ɣân
旱岐(干岐)	ɣân gieg
奈末	nâd mwât
大舍	d'âd śiăg
沙喙-(部)	sa lûk
沙飡	sa swân
及飡	g'iəp swân

ロ，分布圖

·â$_1$		·i̯ed$_3$			·wâg$_1$	·i̯wər$_1$		
·a$_2$								
·ân$_1$								
kân$_2$	ki̯a$_1$	ki̯eg$_1$			kâg$_2$	ki̯wĕd$_2$	ki̯əm$_1$	
kâ$_1$		ki̯wed$_1$				ki̯wĕg$_5$	ki̯əg$_2$	
kâm$_1$				kɔg$_1$				
ɣân$_2$		ɣieg$_1$	ɣi̯wag$_1$					
		g'i̯eg$_2$					g'i̯əp$_2$	
	xi̯ag$_1$							
						ngi̯wĕg$_1$		
sa$_4$	sed$_1$	si̯eg$_3$	si̯ɔg$_2$				si̯ən$_2$	swân$_2$
sän$_1$	śi̯ăd$_1$	śi̯et$_2$	si̯ug$_2$					
	śi̯ăg$_1$							
tsâ$_1$		tsi̯eng$_1$		ts'ôg$_1$			tsi̯əg$_1$	
		dz'i̯ed$_1$			dz'ag$_1$			dz'əg$_1$
tâ$_2$		ti̯ed$_1$						
tâd$_1$		ti̯eg$_{16}$						
		ti̯en$_2$						
		t̂i̯ed$_2$	ti̯ok$_1$	tôg$_2$				tâk$_1$
		t̂'i̯et$_9$						
d'âd$_1$	d'i̯a$_3$	d'i̯ed$_3$	d'ûg$_1$	d'ôg$_1$				
nâ$_7$		ńi̯er$_2$			nâg$_2$			
nâd$_2$		ni̯ed$_2$						
pwâ$_4$	pi̯wang$_2$	pi̯ed$_1$	pi̯wag$_3$		pwâg$_2$	pi̯wĕg$_2$		pwâk$_1$
						pi̯wĕt$_1$		
	b'i̯wăt$_2$					b'iwəg$_1$		b'wəg$_1$
	b'i̯wa$_1$							
mwa$_2$	meg$_1$	mi̯er$_4$	mi̯ŏg$_2$	môg$_1$		mi̯wəd$_1$		mwâg$_1$
mwâ$_1$						mi̯wĕd$_3$		
mwât			mi̯wag$_1$			mi̯wĕn$_2$		
						mi̯wĕt$_1$		
la$_9$	li̯ang$_1$	li̯ed$_{12}$	li̯ŏg$_1$					
		lied$_2$	lûk$_1$					

ハ，音韻組織

前例にならつて母音を整理する。

/a/ /e/ /i/ については從前とおなじ。

[ɣi̯wag]（字），[pi̯wag]（夫），[mi̯wag]（武）は百濟のところ（p,47）にあつたごとく[→iu]となるので /u/ のなかにいれる。

[pi̯wang]（方）は[→i̯wa]となるので /e/ にいれる。

[kɔg]（考），[tôg]（刀），[ts'ôg]（草），[d'ôg]（蹈），[môg]（毛）は，從前のものにはみられない音であるが，

[ôg] → [âu]

[ɔg] → [au]

[ôg] → [âu]

という中古における變化からかんがえて，これらの母音を奥舌母音の /ɔ/ と一應想定できる。とすれば，

[kɔg]（考）：[kâg]（古）

は音韻對立とみられる。なお，[·wâg]（汗）は[→uo]であるから /o/ にいれる。

[i̯ə] [i̯wĕ] [wə̆] [ə] については從前とおなじにかんがえ，

[i̯ə] [i̯wĕ]=/i̯ə/ ： [wə̆] [ə]=/ə/

とする。とすれば，

[si̯ən]（洗）：[swân]（飡）

[tsi̯əg]（子）：[dz'əg]（土）

[pi̯wĕg]（富）[b'i̯wəg]（備）：[b'wəg]（輔）

はそれぞれ音韻對立となる。

母音はつぎのごとくになる。

/a e i o ɔ u i̯ə ə/

子音においては從前とほとんどおなじであるから特にのべることはない。

/k s ts t n p m l/

末尾子音はつぎのごとくにみられる。

-m	1
-n	8
-t	4

-ng　3
-p　1
-k　1

よつてここでも /-n/ をもうけることは容認されるが，/-t/ /-ng/はいかがであろうか。新羅語に「叱」字の使用がおおいことはしられており，また語末に「智」「至」「遲」「知」「氏」などの字がおおくもちいられていることよりすれば，これらも /-t/* の音をあらわそうとしたものかもしれないので，/-t/ をもうけた方がよかろう。/-ng/ についてはよくわからないが，一應 /-n/ のなかにいれておく。

*李基文氏『韓國語の歷史』ではこの「叱」は［s］をあらわすものとしている。p.83～p.84

ニ，推定復原語形

知古	ti ko
阿利那禮(河)	a li na li
波沙寐錦(王)	pa sa mi̯ə ki̯ən
徵叱-許智(伐旱)	mi̯ə tit-ke ti
徵叱-己知-波珍(干岐)	mi̯ə tit-kə ti-pa tin
宇流助富利智干	u lu tso pi̯ə li ti kan
汙禮斯伐	o li si pet
毛麻利叱智	mɔ ma li tit ti
富羅母智	pi̯ə la mə ti
蹈輔(津)	tɔ pə
草羅(城)	tsɔ la
沙比(地名)	sa pi
斯羅	si la
汶得至(人)	mi̯ə nɸ tə̂ kɸ ti
刀伽(城)	tɔ ke
古跛(城)	ko pa
布那-《牟羅》(城)	po na-((———))
夫智奈麻禮(人)	pu ti na ma li
奚-奈麻禮(人)	ki-na ma li

佐利遲(王)	tsa li ti
久遲布禮(人)	ki̯ə ti pu li
［一本云，久禮尒師知干］	ki̯ə li ni se ti kan
伊叱夫禮智(干岐)	i ti tɸ pu li ti
伊叱夫禮知(奈末)	i ti tɸ pu li ti
牛頭-方(地)	ki̯ə tu-pun
尼彌方(地)	ni mi-pun
汶休帶(山)	mi̯ə ku ta
久陁一《牟羅》(地)	ki̯ə te-《———》
彌至己知(奈末)	mi ti ki̯ə ti
久禮叱及(伐干)	ki̯ə li ti tɸ ki̯ə pɸ
奴氏(大舍)	no ti
阿羅波斯(山)	a la pa si
久須尼自利	ki̯ə su ni tsi li
未叱子-失消(弔使)	mi̯ə ti tɸ tsi̯ə-si tɸ su
多々羅(地)	ta ta la
須奈羅または素奈羅(地)	su-na la　so-na la
和陀または委陀(地)	a te　i̯ə te
癸鬼または弗知鬼(地)	ki k̂i̯ə　pə ti kə
枳叱政(奈末)	ki ti tɸ tin
安刀(奈末)	a nɸ tɔ
失消(奈末)	si tɸ su
阿羅(地)	a la
竹世士(人)	tu kɸ se tsə
北叱智(奈末)	pə kɸ ti tɸ ti
伊彌買	i mi me
智洗尒または智洗遲(人)	ti si̯ə nɸ ni　ti si̯ə nɸ ti
知萬	ti men
(及飡)彌武	mi mu
沙鼻岐(城)	sa pi̯ə ki
奴(江城)	no
(奈末)加良井山(人)	ka le nɸ tsin san

(奈末)被珍那(人)	pe ti na
(奈末)甘勿那	ka mi̯ə tɸ na
(大奈末)考那	kɔ na
伐旱(伐干)	pet kan
旱岐(干岐)	ka nɸ ki
奈末	na mat
大舍	ta se
沙喙-(部)	sa lu kɸ
沙飡	sa sən
及飡	ki̯ə pɸ sən

ホ，母音調和

新羅では他のくにより母音をひとつおおく設定したので，母音構成に

前項 / 後項	a	e	i	u	o	ɔ	i̯ə	ə	-n	-t	ɸ
a	12	3	9	1	0	0	3	2	3	0	2
e	0	0	3	0	0	0	0	1	1	1	1
i	6	4	19	5	1	0	5	1	1	1	7
u	1	0	5	1	1	0	0	0	0	0	2
o	2	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0
ɔ	3	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0
i̯ə	2	2	9	3	0	0	2	0	3	0	6
ə	0	0	5	0	0	0	0	0	1	0	1
-n	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0
-t	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
ɸ	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0

ついてもう一度検討してみる。方法は百濟においてこころみたのとおな

じである。

この表からもはつきりしたことがわかるわけではない。たとえば，/a/ が /i̯ə/ /ə/ のまえにくる例をみると，

波沙寐錦 /pa sa mi̯ə ki̯ən/

は當然 /pa sa-mi̯ə ki̯ən/ とわけるべきであろうし，

沙鼻岐 /sa pi̯ə ki/

は /sa-pi̯ə/ の /ki/ (城) であろうし，

甘勿那 /kami̯ətna/

は /kam/ の /m/ とつぎの /mi̯ət/ の /m/ とをわたり音としてとらえたが，これも /kamɸ-mi̯ətɸ-na/

と解するのかもしれない。

富羅母智 /pi̯ə la mə ti/

は /pi̯ə la/ と /mə ti/ にわけられるが，/pi̯ə la/ はどうにもならない。

沙飡 /sa sən/

は，及飡の例からみて， /sa-sən/ とわけられよう。

この様にひとつずつ検討してゆけばかなりの整理はできるであろうが，/o/ と /ɔ/ とはどうも /a/ の類の様である。とすれば，母音調和のグループとしては，

a u o ɔ 一群をなす。
i̯ə ə 一群をなす。
e i 中間的な一群をなす。

ということになり，大體他国語とにたものであつたであろう。

5 ま と め

以上のほかに高麗語をしるしたものがある。「頭霧咿那陛」「達沙」「伊利之」「能婁」「奄鄙」「可婁」「富加林」「邯子」「碩于」「富于」「多武」「阿于」「師需婁」「赴婁毛切」「久禮波」「久禮志」などであるが，語數がすくないためこれだけでは考察に不十分である。しかし勿論，高麗語の研究が重要であることはいうまでもないから，『三國史記』『三國遺事』にみえる資料の研究にすすむことになる。『三國史記』『三國遺事』では，

その他の諸語の研究にもかなり豊富な資料を提供するが，すべて別稿にゆずらねばならない。

ここでは，百濟，任那（伴跛をふくむ），新羅の音韻狀況を『日本書紀』中の記事をとおしてみたのである。そのまとめをのべておく。

イ，母音の種類

百濟	a	o	u			i	e	i̯ə	ə
任那	a	o	u			i	e	i̯ə	ə
新羅	a	o	u	ɔ		i	e	i̯ə	ə
	一群					中間的一群		一群	

ロ，子音の種類

百濟	k	s	ts	t	n	p	m	l
任那	k	s	ts	t	n	p	m	l
新羅	k	s	ts	t	n	p	m	l

なお，有氣・無氣の對立，有聲・無聲の對立はなかつたものとおもわれる。

ハ，語頭には /l/ 音はこない。

百濟に「禮塞敦」という人名があるが，これは漢語名であろう。

任那に「喙己呑」という地名があり，「喙淳」という國名もあるが，『日本書紀』のよみでは「トク」とよんでいる。[lûk] の音に疑問があるのであろう。

ニ，語末音

百濟	-n
任那	-n
新羅	-n -t

ホ，母音調和

三國ともに母音調和は存在していたものとみとめられる。その分類はイにしめしたごとくである。

POÉTESSES DU KOKIN-SHÛ

par OZAWA Masao 小澤正夫

INTRODUCTION

Le Kokin-shû, « Recueil de poèmes du passé et du présent », est un recueil de vers composé au début de l'époque de Heian, vers la cinquième année d'Engi (905) sous le règne de l'Empereur Daigo. Il comprend à peu près 1 100 compositions, dont la plupart sont des *tanka* ou courts poèmes de 31 syllabes, toutes disposées selon le schéma 5-7-5-7-7. Environ quatre cent cinquante d'entre eux sont des poèmes anonymes; pour les autres, les auteurs sont indiqués. Parmi eux, on peut trouver le nom de la Princesse Sotôri, épouse de l'Empereur Ingyô (19e empereur), qui vécut bien avant le siècle de Nara, celui de l'*Uneme* d'Ômi [1] ou, encore, d'Abe-no-Nakamaro (698-770). Mais l'époque qu'il convient de considérer comme la principale du *Kokin-shû* peut, semble-t-il, être située, d'une part à cause du nombre des poètes qui y appartiennent, d'autre part en raison de la manière propre à ceux-ci, entre, environ, la quatrième année de Daidô (809) où l'Empereur Saga (25e empereur), troisième depuis le transfert de la capitale à Heian-kyô (Kyôto actuel), monta sur le trône, et les alentours de la huitième année de Tengyô (945), où les « poètes-arbitres » du recueil, ayant vieilli, achèvent de quitter ce monde et où se termine le règne de l'Empereur Suzaku (61e empereur, successeur de Daigo). On reconnaît généralement, à l'intérieur de cette dernière époque trois périodes, caractérisée chacune par un nouveau développement de la manière poétique, et représentée par les poétesses ci-dessous .

Les chiffres placés entre parenthèses à la suite du nom de certaines poétesses, indiquent le nombre des poèmes de celles-ci insérés dans le *Kokin-shû;* des autres, on n'a conservé qu'une ou deux compositions. Du point de vue de la quantité des œuvres laissées, Ono-no-Komachi et Ise, seules, sont dignes d'être

1. Le terme d'*Uneme* désignait des filles de puissantes familles provinciales, qui servaient à la Cour et s'occupaient de la personne de l'Empereur. Ômi est une province de l'ancien Japon et le pays d'origine de la jeune fille dont il est question ici.

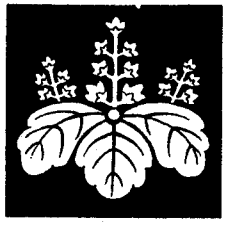
DS
821
.M458

COLLÈGE DE FRANCE
BIBLIOTHÈQUE DE L'INSTITUT DES HAUTES ÉTUDES JAPONAISES

MÉLANGES OFFERTS A M. CHARLES HAGUENAUER

EN L'HONNEUR DE SON QUATRE-VINGTIÈME ANNIVERSAIRE

ÉTUDES JAPONAISES



L'ASIATHÈQUE
6, rue Christine
PARIS

1980

Cet ouvrage a été publié grâce à une subvention de la « Fondation pour l'étude de la langue et de la civilisation japonaises » et avec le concours de l'Équipe de recherche associée 647 du C.N.R.S.